

作家 立松和平

日本の自然を守っているのは 第一次産業である

立松和平氏は一貫して日本の農村文化や農的なライフスタイルに、強い関心を向け続けてきた作家である。デビュー作の『遠雷』には宇都宮の郊外で、農村に押し寄せる都市化の波と、それにとまなう価値観の崩壊を間近に見ながら育った自身の体験が色濃く反映されている。国内外に旺盛に旅をする行動派の作家である氏は、自然環境保護問題にも積極的に取り組み、足尾のげ山に植林を行ったり、知床ではナショナルトラストの植林運動にも関わっている。そんな氏が見つめてきた農村と農業の変化について話をうかがった。

『遠雷』から四半世紀、 変化した農村の光と陰

昆吉則（以下、昆） 立松さんの『遠雷』を読んだのは、20年以上前、私が農機具の業界紙に勤めていたころでした。機械化と都市化の波の中で揺れる当時の農民の姿がよくとらえられていると感心しました。その

ころと現在の農業や農村を比べて、今どのように感じていらっしゃるのでしょうか。

立松和平（以下、立松） 今の農業は私が『遠雷』を書いたころとは全然違っています。当時は、押し寄せる都市化の波をどうやって乗り越えていくかというのが大きな問題でした。でも、食管法などもあって、農業は守られていた。しかし、今は生

産調整が行われて4割減反といった状況の中で、どうやって農業を守っていくか、そう考えると極めて難しい。

大規模農業をする、あるいは生産性の高い農業を目指すという方向もあると思います。先日も北海道の知内でニラを栽培している農家を取材してきたのですが、そこでもコマからの転作に成功したところは豊かになっていきます。逆に失敗したところは、非常に辛い状態にありますね。昆 そこには主体性の問題があるのでしょうか。食管法に守られている時代にコマを作るといえるのは、日本人が飢えていたから食糧管理をしなければならなかった。でも、そういうことに慣れきってしまった農家だと、そこから主体的に動くことができない。辛いといっても、一方で働

き場所はたくさん出てきていると思うんです。

立松 だけど、基本的に出稼ぎはイヤだというのは人間の自然な感情です。出稼ぎも形を変えた兼業ではありますが、これまでは出稼ぎしなくても、なんとかその土地で生きていけるようにしようという努力がなされてきました。

でも、時代がすっかり変わってしまった。10年後、20年後を見通すことなんて、これだけ激しく時代が変わっているような状況だと無理だと思えます。

ただ、先日、静岡の磐田に行ったのですが、その農協はチンゲンサイが盛んなんです。ちょうど『遠雷』の時代に都市化されていた地域なのですが、お父ちゃんたちは金を稼ぐため工場に働きに行って生活を守

ついていたわけですが。そのお父ちゃんたちが定年になってから母ちゃんたちがやっていったチンゲンサイをいっしょに作り、今では代表的な産地になってきている。そうやって守ってきた農業もあります。

農村の持つ豊かな可能性を生かす知恵

昆 日本での農業については紋切り型な言い方がされがちですが、実は磐田のチンゲンサイの例にあるように、現場には多様な試みがあるいろいろあるわけです。大規模な稲作をやっている農家よりも、庭先で作った野菜を直売所を持っていて勝ち残っていくようなおばさんのほうが、今の時代に求められた形だという気がします。

これまで、農家が作った農産物を国が買い上げてくれたので、市場という存在に気づくチャンスから隔離されてきました。しかし、逆に今だからこそ、農業の持つ多様性がビジネスチャンスを生むのではないのでしょうか。そうしたチャンスを生かそうとする人たちの中から、新しい時代や文化が作られていくのだと思います。

立松 知内の農協で会った60歳くらいの農家の人たちが話していたんで

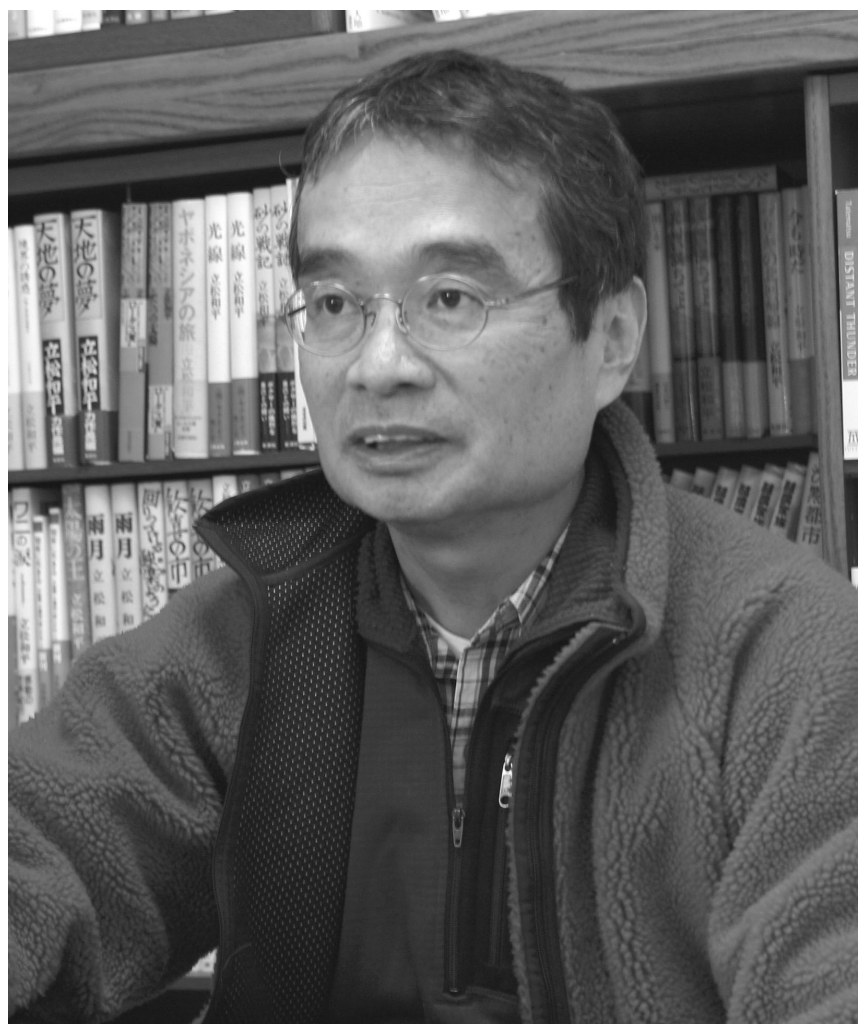
すが、「今は経済のために働いていて、つまらない」というんです。昔は貧しかったんだけど、なにかあるとみなで集まって一升瓶を立てながらニラのことを話し合い、ニラが終わったら小旅行に出かけたり、花が咲いたら仲間とジンギスカンをやったりして楽しんでいました。

ぼくは今の世の中を一番だめにしているのはコスト至上主義だと思うんです。コストというのが世の中の大原則で、コストから外れたものは生き残れない。今話した旧世代の「生き方」なんて、コストの意識からすればいらぬものです。

今から30年くらい前、ニラ一束2円ということもあったけれど、みな楽しかったというんです。それが今では世界全体がコストに苦しんでいる。

ぼくは人生で一番楽しいのは放蕩だと思っているんです。それはコスト意識のないところで生きるということです。そういう意識でいるなんてことは今では許されませんが、朝までハウスで酒を飲んでしまうというような小さな放蕩はある。「遠雷」の中にもそんな場面が出てきますが、あれはコスト意識を持って苦しんでいる若者の物語でもあるのです。

昆 コストを下げるのはできない話



立松和平

■プロフィール (たてまつ・わへい)

1947年栃木県生まれ。早稲田大学政経学部卒業。1980年『遠雷』で野間文芸新人賞。1986年、アジア・アフリカ作家会議の「85年度若い作家のためのロータス賞」。1997年、小説「毒一風聞・田中正造」で第51回毎日出版文化賞受賞。国内、海外各地を旅する行動派の作家として知られる。自然環境保護の運動にも積極的に取り組む。ふるさと回帰支援センター理事長。



ではないと思いますが、コストのこ
としか言わないというのは、豊かな
社会になる以前の欠乏の論理だと思
うんです。

どういうことかといいますと、1
970年に農家の減反が始まったこ
ろから、日本は欠乏の時代から過剰
の時代へと転換したように思うんで
す。欠乏は足せば解決しますが、過
剰の解決は困難です。そこに現代の、
さまざまな問題の解決の難しさがあ
るように思います。

今の消費者の半分はコメを直売で
買っています。彼らが気にするのは
値段ではなく満足感です。満足の市
場というのは、我々が豊かな社会に
なって初めて体験していることでは
ないか。飢えていた時代のコスト問
題と、今の豊かな日本の環境は違う
ように思います。

編集長 インタビュー

立松 ただ、豊かさというのは何な
のでしょ。昔は農家ならば、家を
一回りすれば必要なものがなんでも
手に入りました。仏壇の花でも、お
かずの野菜でも、ニワトリでも手に
入った。それが根底的な豊かさだっ
たと思います。

けれども、今の都会の暮らしでは
仏壇の花も手に入らない。お金を出
せば買えるといいますが、仏壇の菊
は都心では売ってない。もっとも、
そんなことを言ってもノスタルジー
ですけどね。

昆 私もそうした農村の魅力にひか
れて、この世界に入りました。でも、
それをノスタルジーと見ず、積極的
に生かしていくことも可能ではない
でしょうか。農産物だけではなく、
伝統的な農家の暮らし方そのものを
おすそ分けするという事業もあると

思います。
大切なことは、農業生産の持つ多
様な可能性を生かす知恵を出してい
くことだと思います。

日本の根底にあるのは 第1次産業

立松 今、私はふるさと回帰支援セ
ンターというNPOの運動に関わっ
ています。端的にいえば、田舎に帰
ろうという呼びかけです。ただ、定
年になったから田舎に帰れといっ
ても簡単ではない。でも、月に2、3
回でもいいから田舎暮らしをできな
いか、それもなにか地域のために働
けないかといったことを考えていま
す。

今、農村に必要なのは都会的なノ
ウハウです。商品開発や流通などの
ノウハウの知恵を、都会の人に貸し
てもらいたいんです。

最初は一人相撲のようなものでし
たが、今年になって大きな反応が出
てきています。今は多様な考え方が
あります。農村というのも、そうし
た多様な生き方の展開できる場所だ
と思うんです。

昆 今、都会の人が田舎や農村に求
めるのは、いわば面白不変とでもい
うか、不便だけれど人間らしい暮ら
しなんだという満足感だと思います。

迎える側の田舎のおじいちゃんや
おばあちゃんも、期待しているのは
お金ではなく、感謝されることなん
です。そうしたニーズを組み合わせ
ることで、農村は豊かな市場になり
うると思います。お金の市場ではな
く、いわば満足市場です。

立松 帰農は簡単ではありません
が、私はふるさと回帰支援のため
できることをやろうと思っています。
都会は人が余っているし、地方は人
材不足です。基本的には自分たちの
生き方を満足させることを目指す。
やり方はいろいろあると思うんで
す。

私は知床に丸太小屋を持っている
ことが縁で、知床の農家の人たちと
の付き合いがあるので、知床は
非常に豊かなんです。彼らと話して
いて喜びのある農業をやろうとい
うことで、10年ほど前に「知床ジャ
ニ」という会社を作りました。

私は、自然を守っているのは第1
次産業だと思っています。漁業がき
ちんとしないと海を守れないし、林
業や農業もそうです。知床は大観光
地で人がたくさん来ます。その観光
客に食べてもらうものを作る。それ
が本場の地産地消だと思います。や
ればできることはいっぱいあると思
うんです。

(まとめ 田中真知)